View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

心的記述は物的記述へとなぜ還元できないのか

渡辺隆明

私たちは、自分たちのふるまいについて、多くの場合「〜と信じている」や「〜したい」というような信念や欲求によって説明している。自分たちについてなされる心的記述は、ふるまいについて説明が行われる場面で数多く出現する。そのような時、信念や欲求は、存在論的に確かめられなくとも、存在するものとみなされている。このように、私たちは、自分たちについて言及する時、日常的に信念や欲求などといった心的状態にコミットした説明をする。私たちの自分たち自身についての心理学的説明の枠組みは「素朴心理学（folk psychology）」と呼ばれる。このことは、私たちの日常的な見解が、心の実在論を必ずしも前提しなくともよいということの一つの証左である。そのような存在は、理論的措定物のようなものとして扱われている。素朴心理学は、信念や欲求に依拠しながら人々の行動を説明する枠組みを理論が支えているのだと見なされている。

近年の物理主義（存在するものはすべて物的なものである、等の主張）に属する主張を支持するために用いられることが多い見解の一つに、消去主義がある。消去主義者たちは、心的な記述は消去されるべきであると主張する。消去主義者の代表的な一人であるポール・M・チャーチランドは論文「消去的唯物論と命題的態度」（信原幸弘編『シリーズ心の哲学Ⅲ翻訳篇』勁草書房、２００４年、所収）の中で、素朴心理学による記述は不完全なものであると述べ、それらを科学的な記述へと還元するということは到底出来るものではないと主張する。素朴心理学の欠点とは、1. 精神病、創造性、知的能力の個人差、知覚や錯覚などを説明できないこと、2.数千年用いられているが、進化がないこと、3.他の諸科学と折り合いが悪いこと、である。そして、さらに一歩進んで、そのような素朴心理学による記述は消去されるべきであるという。チャーチランドによる素朴心理学へのこのような批判は、物理学を基準とした強い意味での理論を素朴心理学へも求めたことによると考えられる。

しかしながら、素朴心理学は必ずしも理論的でなければならないと考えなくともよいと筆者は考える。このことは、素朴心理学が、（チャーチランドに批判されるような）強い意味での理論であるとみなされてきた理由について、水本正晴が示した議論をみれば明らかである。すなわち、素朴心理学が「理論」であることが求められた理由とは、心とみなされる私たちの「内的」過程が直接観察されるようなものではないので、理論的に説明することによって、その間接的な証拠を求めようとしたことによる、と水本は論じるのである（石川幹人・渡辺恒夫編『入門・マインドサイエンスの思想――心の科学をめぐる現代哲学の論争』新曜社、２００４年、一七七頁）。

したがって、素朴心理学が本質的に強い意味での理論である必要はないことがわかる。なぜなら、素朴心理学にとって、それが「理論」と見なされねばならない理由が、「内／外」の区別のとらえ方を支持するためであったのだとするならば、「理論」であることにこだわらずに「内／外」の区別を成立させることもできるからである。

そこで、心的枠組みの特徴について論じているデイヴィドソンの議論（Davidson, D., *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press, 1980（服部裕幸・柴田正良訳『行為と出来事』勁草書房、１９９０年）が参考になる。彼によれば、心的枠組みの特質を主張するのは、私たちが「根元的解釈（radical interpretation）」を行っているとするからである。それによれば私たちが誰かの何らかの発話やふるまいを観察する時、私たちは必ず、その相手に対して人の内的状態に言及した信念を帰属さ

せ、さらに、信念の性質から合理的存在とみなさなければならない。人の信念に特有の性質とは、規範的性質と全体論的性質である。したがって、心的枠組みにおける記述は、物理学における記述のような法則論的な記述へと還元することができない（心的記述の非法則論的性質）。

素朴心理学は、それが主張する心的枠組みが理論的であるとされてきたが、その枠組みをデイヴィドソンの議論に基づき、規範的性質と全体論的性質によって説明することができる。しかのみならずこのことによって、素朴心理学を理論であるとみなすことによって生じた困難を回避することができるようになるのである。

以上のように、心的記述は、それが基づく心的枠組みの特徴によって、物理的枠組みへと還元できないのである。

（大学院文学研究科宗教学専攻修士課程）